

# 南極OB会 会報

No. 14

発行 南極OB会  
会長 川口貞男  
編集 広報委員会

## 目次

|                                          |    |
|------------------------------------------|----|
| 口絵写真 昭和基地のオーロラ                           | 1  |
| 南極条約 50 周年記念会議に出席して                      | 2  |
| 解説 南極条約とは                                | 3  |
| 2011 年度OB会総会開催                           | 5  |
| ミッドウィンター祭に合わせ<br>第7回「南極歴史」講話会も開催         |    |
| 第7回「南極の歴史」講話会                            | 8  |
| 1937 山脈の探検・白瀬南極探検隊の<br>地質資料について          |    |
| 白瀬南極探検 100 周年記念事業の紹介                     | 9  |
| 国際講演会<br>「20 世紀初頭、南極英雄の時代の<br>探検と白瀬南極探検」 |    |
| 「協賛金の募集」                                 | 10 |
| 南極関連情報                                   | 10 |

|                                                |    |
|------------------------------------------------|----|
| 越冬隊員とのテレビ会議のエッセーが<br>佳作賞受賞<br>「越冬隊員の話聞いて考えたこと」 |    |
| 連載支部便り⑨（札幌支部）                                  | 11 |
| 「白瀬南極探検 100 周年記念講演会」<br>開催                     |    |
| 昭和基地便り                                         | 13 |
| 昭和基地大型大気レーダー(PANSY)<br>建設奮闘記                   |    |
| 会員の広場                                          | 15 |
| 南極OB会事務局便り<br>偲ぶ会<br>川崎巖さん、三田安則さん<br>訃報        |    |
| 広報委員会からのお知らせ                                   | 16 |



昭和基地のオーロラ 第52次隊 現在越冬中の久光純司隊員撮影（2011年5月撮影）

# 「南極条約サミット」国際集会に出席して

吉田栄夫

(2S、4W、8W、16S、20S、22W、27S)

## はじめに

2009年11月30日から12月3日まで、ワシントンのスミソニアン博物館で、1959年の南極条約調印50周年を記念した、「南極条約サミット：国際ガヴァナンス（統御）における科学と政策の相互作用」（すでに「極地90号」に報告を書いた国立極地研究所の山内 恭さんの訳による）という国際集会が開かれた。これは民間（非政府）の国際組織委員会が、種々の民間や政府からの援助を得て開催したもので、我が日本極地研究振興会も貧者の一灯を進呈した。我が国からは山内さんと極地研究所の渡邊研太郎（国際企画室、現室長）さん、それに私が出席した。記念式典を加えたシンポジウム形式の集会で、どのような発表が行われたかなどは、山内さんの報告を見て頂くとして、誌面を頂いたので野次馬として参加した私からも見聞を付け加えたい。

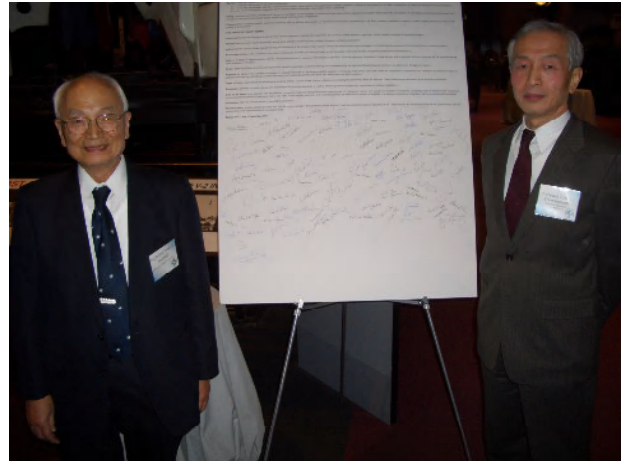
## 集まった人びとの中から

国際組織委員会の委員長を務めたのは、ポール・バークマンで、海洋生物学者から私のような後期新生代地質学の研究者ともなり、彼がオハイオ大学にいた1993年に日本学術振興会の助成を受け、極地研究所の私のもとで、1年間を一家で過ごした男である。ユダヤ教徒のアメリカ人であるが、現在はスコット極地研究所の「北極海地政学（Arctic Ocean Geopolitics Programme）」の責任者を務めており、極地での科学と政治・政策の課題を扱うこの集会でのコンビーナーとして適任であったのであろう。委員のひとりD.ウォルトンは英南極調査所の名誉所員、生物学者であるが、以前から国際的な組織や協議に関わることの多い人で、私的に出版社も経営し、やり手である。白瀬隊の「南極記」英訳本の出版にも関わってきた。

集会の標題からわかるように、ここには研究者のほか、元あるいは現外交官、国際

政治学者、法律家、極地研究機関当局者などが多く見られた。アメリカのT.スカリは米務省の課長として長く南極条約に基づく会合に携わってきた（今は大使らしい）。私は特に「南極鉱物資源活動規制条約」や「環境保護に関する南極条約議定書」の協議で、接触が多かったので、久闊を叙する機会となった。厳しいやりとりをしたチリのJ.ベルグーニョ大使、今は国際司法裁判所にいるロシアのV.ガリチンもこの仲間だ。

当然極地科学の研究者も多かった。日本に知己の多い韓国のK.イエドン、ノルウェーのO.オルハイムなど極地の常連がいた。この時米極地協会会長であったJ.ベーレントと私がIGY以来のただふたりの研究者と紹介されたが、そんなものは吹っ飛ぶ大先輩が出席という。なんと1949-52年の三国共同探検隊地質学者E.ルーツであった。



「採択された” Forever 宣言” のポスターにサインした吉田（左）と山内氏」

## 会議の運営

オープニングでのモナコ、アルバート II 世公の講演のあと、全体会議として「南極条約の起源」など七つのセッションが組まれ、それぞれ数名の講演の後、さらに数名が加わって同じテーマでパネル討論を行うという形であった。このひとつ「南極条約システムと他の国際取決めの間の相互作

用」を山内さんが司会された。このほかに応募で受賞した若手研究者1～3位の発表や、議論しながらの昼食会もあった。最終日には“サミットから学んだことを応用する”として「北極のガヴァナンス：南極からの学習」と「国際的空間の歴史」の二つのワークショップがあった。私は後者のワークショップで発言したくなり、わが国が南極観測を始めた頃の国内的国際的事情と参加から学んだことを話し、マレーシアなどからの出席者を意識して、これが南極観測後発国の参考になれば幸いとした。この発言をふくらませてプロシーディングスに載せよと言われ、立派な論文の並ぶ中で、わずか1頁ほどの挿入文となってしまった。

## 南極条約は大事だ

この会合で改めて南極条約のユニークさを想った。科学調査の国際協力の成功を基礎に結ばれた条約、お互いの立場を尊重しながら領土主権主張の凍結を図るという不安定な取り決めで、地球上に広大な非武装地域を作りだし、冷戦中、ほかでは対立する東西と南北が、科学を基礎に会話を交わせられたフォーラム、その後の多くの国を加えたさまざまな環境保護の取り組み、いずれも多く努力を必要とするが、貴重な国際的実験である。今年わが国では南極条約発効50周年の記念切手が発行された。これを機により広い理解を得たいものである。(敬称は省略しました)

☆☆☆☆☆☆☆☆

## 解説

### 南極条約とは

米ソの相互不信から生まれた条約、制定に日本もちょっぴり貢献

柴田鉄治（元朝日新聞記者（7次夏、47次夏））

1959年に制定され、61年に発効した南極条約とはどんなものか。50周年の機会に、制定の経緯とその後の歩みを振り返ってみたい。

各国が協力して地球のナゾに挑もうという国際地球観測年（IGY）が57～58年にあり、その一つとして日本を含む12カ国が参加して南極観測事業が華々しく展開された。それが終わったとき、今後の南極をどうするか、国際的な枠組みを定めようと米国が南極条約の制定を提案したのである。

そのときの米国の真のねらいは、「ソ連が南極に軍事基地をつくったら大変だ。それだけは阻止したい」というものだった。北極観測に多くの実績をもつソ連の南極での力強い観測活動を見ていて、脅威を感じたということらしい。

当時は、米ソ対立の冷戦のさなかであり、ソ連の方も「米国が軍事基地をつくったら

大変」と考えていたようなのだ。米国の提案にすぐ「賛成だ」と乗ってきたのがソ連だったのである。つまり、南極条約は、米ソの相互不信から生まれたものだといっている。

世界を二分する東西両陣営の主要国、米ソが賛成すれば、条約は簡単にまとまるかと思ったら、そうではなかった。当時、イギリス、フランス、ノルウェー、アルゼンチン、チリ、オーストラリア、ニュージーランドの7カ国が「南極は自国の領土だ」と主張しており、その領土権主張国が難色を示したからだ。

次頁の図が領土権を主張する範囲で、イギリスとアルゼンチン、チリの主張する範囲は重なり合っている。仲の悪かったイギリスとアルゼンチンの間で、基地の国旗の奪い合いといった小競り合いまであったといわれている。

この領土権主張国に対して、米ソとともに

に説得にあたったのが日本だった。そのいきさつは、こうだ。

100年前、白瀬探検隊が南極遠征をやりようとしたとき、日本政府はなんの支援もしなかったのに、南緯80・5度まで踏破して帰国するや、その成果だけはちゃっかりいただいて、「日本は南極に領土を請求する権利がある」と主張したのである。国家とは、いつも欲張りなものだ。

ところが、戦後、サンフランシスコ講和条約で、日清・日露戦争で分捕った領土などと一緒に、南極の領土請求権も放棄させられたのである。しかし、何が幸いするか分からない。世界で初めて南極の領土請求権を放棄した国として、日本が領土権主張国の説得にあたり、南極条約の制定にひと役買ったのだ。



領土権を主張した国とその範囲

米ソの相互不信という動機は不純だったが、出来上がったものは素晴らしかった。第1条には、もともとの目標である軍事利用の禁止を高らかにうたっており、第2、3条で科学観測の自由と、国際協力の推進を定めている。

第4条では、問題の領土権の凍結をうたっている。新たな領土権の主張は認めないが、すでに主張している国の領土権は放棄しなくてもよいと複雑な表現をとっている。

難色を示す領土権主張国への配慮がうかがえるが、軍事利用の禁止や科学観測の自由などで各国の主権は認めていないので、これで十分なのだ。

そのほか、30年後に見直すことなど、細かなことを定めた全14条の南極条約が制定され、各国が批准して発効した。こうして地球上で初めて「国境もなければ軍事基地もない大陸」が生まれたのである。いわば、人類の理想を実現したモデル地域が誕生したのだともいえよう。

その後、70年代の石油危機をきっかけに、80年代にかけて南極の石油資源をめぐって「生臭い風」が吹いたことがあった。鉱物資源ともなると、凍結されているはずの領土権が、またまたうずきだしたのだ。

しかし、幸いなことに70年代から強まったもう一つの、地球環境を守ろうという「環境の風」が、生臭い「資源の風」を吹き飛ばしてくれたのである。

そして迎えた30年後の見直し期、1991年に、南極条約はいっそう強固なものとなって存続することになった。南極での資源の開発は向こう50年間認めないこと、南極地域での環境保全を一段と厳しいものにすることなどを定めた新たな議定書がまとまり、磐石の体制になったのだ。

たとえば、南極の生態系を壊す恐れがあると、イヌを連れて行くことまで禁止されたのである。これからはもう、タロ・ジロの南極物語が生まれることはないのだ。昭和基地から日本へのゴミの持ち帰りも始まっている。

南極条約によって、南極大陸は人類の共有財産になったのだ。この南極条約の精神が、宇宙・天体条約、海洋法条約へと受け継がれ、月のような天体も、深海底の資源も、人類の共有財産だという考え方が広がってきている。

北極には南極条約のような取り決めがないので、いま、とても生臭い風が吹いている。北極にも早く北極条約をつくるべきだろう。さらにいえば、世界平和と地球環境を守るために、この南極条約の精神をもっともっと世界中に広げたいものである。







## 2011年度OB会総会開催

ミッドウィンター祭に合わせ第7回「南極の歴史講話会」も同時開催

2011年度南極OB会総会が、6月20日（土）午後、70人が参加して、東京・四谷の主婦会館「プラザエフ」で開催された。またこの日は、総会の前の午後2時から、同ホールで、第7回「南極の歴史」講話会が一般公開で行われた。4次で越冬し、21次の観測隊長を務められた木崎甲子郎氏が「1937年山脈の探検・白瀬南極探検隊の地質資料について」と題して1時間20分にわたり、4次隊での経験や大和山脈調査、など裏話も含め講話を行った（内容は8ページ参照）。また、この日の日程の最後はミッドウィンター祭で、同会館2階のレストランエフに会場を移し、歓談した。会場には南極の氷を使ったオンザロックなどが用意され喉を潤しながら、第52次隊越冬隊の皆さんからのメッセージに、真冬の昭和基地を偲び、歓談を楽しんだ。

### 南極OB会総会

川口貞男会長の発声で、この1年間に亡くなった16名のOBの方に黙祷を捧げ、次いで開会の挨拶では「現在進行中の白瀬南極探検100周年事業を推進しOB会会員の協力」を願う旨を述べた。



総会開会挨拶をする川口貞夫会長

ここで議長に神田啓史氏（副会長）を指名、議事に入った。

### 〔一般報告〕

松原廣司運営委員長

OB会総会は、今回もミッドウィンター祭と共に開催することとした。

2010年度の活動方針については、昨年（2010年）6月19日に開催したOB会総会で承認されており、承認された活動方針をもとに活動している。

運営委員会は、月1回（第3土曜日）に

広報委員会、アーカイブ委員会、記念事業委員会、南極教室委員会との合同で開催している。

なお、運営委員会の議事録は各支部にメールで送り会員に周知されているので、内容について質問や意見等があれば遠慮なくOB会事務局まで連絡願いたい。

### 〔各委員会報告〕

柴田鉄治広報委員長

昨年度の総会以来、会報は11号～13号をそれぞれ予定通り昨年9月、今年の1月、5月に発行した。

里見穂南極教室委員会

発足時の登録者名簿が古くなり、新たに講師登録を募集した。全国から80人以上の方から講師登録を頂いた。

小野延雄アーカイブ委員長

現在の活動状況を報告する。

（1）OB会員からの提供資料を受け入れた。

（2）市川のISSに保管してある資料の整理、目録作成作業をした。

（3）国立極地研究所アーカイブ室との連携を進めている。

渡邊興亜白瀬南極探検隊百周年事業担当

（別項、「白瀬南極探検100周年記念事業」9ページ参照）

〔平成10年度財務関係〕

田中洋一会計担当

2010年度会計収支決算は下の第1表のとおり報告し、報告のとおり承認された。なお、通信費納入者数の経緯は第2表。

練木允雄監事・監査報告

2011年6月1日に2010年度（'10年4月1日～'11年3月31日）の会計について監査を行った。金銭出納簿及び関係書類、預金口座通帳、振替口座管理状況等について点検したが、すべて正確に管理されていることを確認し、適正に執行されていたことを報告した（会計監査報告を参照）。

「平成11年度事業計画」

ついで松原運営委員長が「11年度事業計画」を次のように報告・承認された。

11年度活動計画

- ・OB会会報の発行（年3回、1月末、5月末、9月末を目安に）

- ・壮行会（11月）、総会、ミッドウィンター祭開催（6月）

・50周年記念継続事業

- （1）アーカイブ事業の推進
- （2）支部事業（講演会等）の賛助
- （3）「南極の歴史」講話会の開催（年2回予定）

・南極教室の継続・推進

・白瀬南極探検100周年記念事業推進

・会員間連絡の強化（HPの充実等）

などを実施する予定である。

平成11年度予算

また、田中洋一会計が'11年度予算案を次ページ第3表のように提案し、承認された。

最後に、会長が新しい運営委員長に神田啓史副会長を指名し、10年度総会は閉会した。

一旦休憩の後、会場を同会館2階のレストランエフに移し午後4時から、ミッドウィンター祭が盛大に開かれた。

第1表

2010年度収支決算

平成23年3月31日

(単位:千円)

| 収                   | 入     |       | 支                        | 出     |       |
|---------------------|-------|-------|--------------------------|-------|-------|
|                     | 予算    | 決算    |                          | 予算    | 決算    |
| 2010年3月末残高          |       | 4,839 |                          |       |       |
| 2010年度通信費<br>(877人) | 2,700 | 2,631 | 会報発行関係費用                 | 1,500 | 793   |
|                     |       |       | 事務室運営費<br>(借室料、通信費、事務局等) | 1,000 | 1,582 |
|                     |       |       | 交通費<br>(委員会等)            | 200   | 171   |
| 総会・壮行会              | 550   | 822   | 総会・壮行会                   | 550   | 939   |
| グッズ料金               | 200   | 308   | グッズ経費                    | 150   | 16    |
| カレンダー               | 550   | 856   | カレンダー経費                  | 500   | 817   |
|                     |       |       | 庶務関係費用                   | 30    | —     |
| その他                 | 2     | 0     | 予備費                      | 72    | —     |
| 小 計                 | 4,002 | 4,617 | 小 計                      | 4,002 | 4,378 |
|                     |       |       | 2011年3月残高                |       | 5,078 |

(注) 2010年度収支決算は2010年3月31日現在

# 会 計 監 査 報 告

| 2010年度通信費納入経過 | 人     |
|---------------|-------|
| 4月～6月         | 593   |
| 7月～9月         | 111   |
| 10月～12月       | 45    |
| 1月～3月         | 97    |
| 直払い           | 31    |
| 合計            | 877   |
| 2009年度実績      | (909) |

南極OB会会則第8条により、2010年度会計(2010年4月1日～2011年3月31日)について、2011年6月1日に監査を実施した。

金銭出納簿及び関係書類、預金口座通帳、振替口座管理状況等について点検した結果、すべて正確に管理されていることを確認したので報告します。

第2表 2010年度の会費納入者の経緯

2011年6月1日

南極OB会

監 事 練 木 允 雄



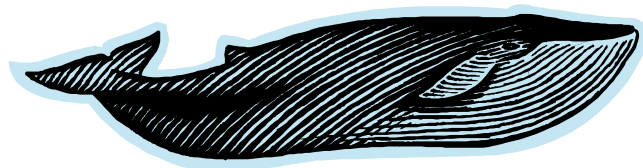
第3表

## 2011年度収支計画

平成23年6月18日

(単位:千円)

| 収 入               |       | 支 出                       |       |
|-------------------|-------|---------------------------|-------|
| 2011通信費<br>(900名) | 2,700 | 会報発行関係費用<br>(年3回発行 振込手数料) | 1,100 |
|                   |       | 事務局運営費<br>(借字料、通信費、事務局等)  | 1,500 |
|                   |       | 交通費                       | 200   |
| 総会・壮行会            | 700   | 総会・壮行会                    | 700   |
| グッズ料金             | 150   | グッズ経費                     | 20    |
| カレンダー             | 550   | カレンダー経費                   | 500   |
|                   |       | 庶務関係費用<br>(会員関係弔電等)       | 30    |
|                   |       | 予備費                       | 50    |
| 計                 | 4,100 | 計                         | 4,100 |





## 第7回「南極の歴史」講話会

(2011年6月18日、東京主婦会館)

### 「1937年山脈の探検・白瀬南極探検隊の地質資料について」

木崎甲子郎（4次越冬、21次観測隊長、琉球大学名誉教授）



講演する木崎甲子郎氏

#### 講演要旨

「宗谷時代」の日本南極地域観測隊（JARE）越冬隊は果敢に内陸進出を図った。1次隊のポツヌーテン探検、3次隊の「まぼろしのANARE山脈」探検に続き、4次隊はノルウェー隊が望見したという内陸山地の実地踏査を企てたのである。1936～37年にノルウェーのラルス・クリステンセンが東南極大陸の東経50～80度の海岸線を飛行し、プリンス・ハラルド海岸を発見した折、内陸に山脈の存在を見出した。これがいわゆる「1937年山脈」である。

夏旅行を前に、内陸へのルート偵察が行われたが、当時は「白瀬氷河」落ち込み域の氷床地形なども未知の時代であり、クレバス帯に迷い込みながらの大苦戦を強いられたという。しかし、「1937年山脈」への接近路は見出され、まさにこれから出発

という時に、福島隊員のブリザード中の遭難事故が起こり、一時は探検行の断念も検討されたが、鳥居越冬隊長の勇断で実施されることとなった。

折から、ブライド湾に基地を設けていたベルギー隊の航空機が昭和基地に飛来し、彼らもブリザードに巻き込まれて遭難寸前という状況もありその対応には日本隊も大いに協力するが、飛び立った航空機は先に「1937年山脈」の空撮を行い、山地の主要な峰や氷河に名前を付けられてしまうという先陣争いともいえる出来事があった。

しかし、4次隊の内陸探検は山地の正確な位置確定、全域の地質調査、最高峰への初登頂など大きな成果をあげ、成功裏に終わった。この山地は後に「大和山脈」名付けられ、その最高峰は福島岳と命名された。

講演では、こうしたわが国最初の本格的な内陸探検、山地探検での出来事が当事者隊員によって詳しく語られ、あらためて感銘を受けたのである。

また、講師の木崎甲子郎琉大名誉教授は北海道大学理学部時代に白瀬南極探検隊が持ち帰ったペンギンの胃の中から採集された岩石試料（薄片試料が東大理学部地質学教室に保存）の鏡下鑑定研究を行い「白瀬隊によって採集されたキングエドワード七世陸地の岩石に関する覚え書」（南極資料、第5号、1958）として報告されており、その内容について話された。

（紹介文：渡辺興亜）







## 白瀬南極探検 100 周年記念事業の紹介

白瀬南極探検 100 周年記念事業は、昨年より「白瀬日本南極探検隊 100 周年記念プロジェクト実行委員会（秋田県）」や「白瀬南極探検 100 周年記念事業委員会（南極 OB 会）」が「国立極地研究所」や「(財) 日本極地研究振興会」と協力して推進している。

南極 OB 会では、地方支部主催の講演会などを通し、この事業の日本全国への情報発信をしている。すでに昨年 11 月 27 日、北陸支部は羽咋市で「開南丸を操った男（会報 12 号支部便りで報告）」を、今年 3 月 19 日には「2011 年東京講演会」（会報 13 号で報告）などを実施した。今年はさらに北海道支部が 7 月 24 日に、信州支部が 7 月 31 日に、東海支部が 9 月 10 日にそれぞれ実施した。また、山陰支部が 11 月に、九州支部、阪神支部は来年の早いうちに実施する予定である。各支部で実施されるこれらの講演会等の実施状況については、逐次支部報告として会報に掲載する。

ここでは、東京において来年一般講演会と国際講演会を開催する予定になっているが、主として国際講演会の内容について紹介することとする。

### 国際講演会

#### 「20 世紀初頭、南極英雄の時代の探検と白瀬南極探検」

白瀬南極探検 100 周年記念事業委員会 渡辺興亜

来年（2012 年）2 月 24 日（土）～25 日（日）に東京、神保町一橋講堂（学術情報センター）にて、白瀬南極探検 100 周年を記念した一般講演会、展示会（24 日）および国際講演会（25 日）を開催いたします。

100 年前の 1911 年にはノルウェーのアムンゼン隊が 12 月 14 日に人類最初の南極点到達を果たしました。遅れること 1 ヶ月、1912 年 1 月 16 日に英国のスコット隊も南極点に達しています。スコット隊はロス島の根拠地への帰還を果たせませんでした。その頃、ロス海東側の鯨湾を出発した白瀬隊は 1912 年 1 月 28 日に南緯 80 度を越えた地点に達し、その地を「大和雪原」と命名しました。同じ頃、野村船長に率いられる「開南丸」はエドワード 7 世ランドの沿岸を調査しつつ東に航海し、西経 151 度 20 分に達しましたが、行く手を群氷に阻まれ、鯨湾へ帰還、陸上隊を収容しています。

1911～12 年の夏、ロス海に面する南極大陸ではこうした南極探検史上のエポックメイキングな出来事が起こりました。

今回の国際講演会は当時、ロス棚氷から内陸に向った三つの探検隊（日、英、ノルウェー）の関係者を招聘し、それぞれの国の成果とともに、その成果が現代社会にどのように伝えられているかを語ってもらう事がその趣旨です。

この他に、「南極探検史上、英雄の時代」の幕開けとなった 1897～99 年のベルギー隊「ベルジカ」号の探検についての講演も企画しています。ジェルラーシ中尉率いるベルギー隊はベリングスハウゼン海でビセットされ、強制的とはいえ、初めての

南極越冬を余儀なくされました。この船には後に南極点に到達したアムンゼン、北極点探検で物議を醸したフレデリック・クックが乗り組んでおり、越冬生活に大いなる

貢献をしたと言われています。また、韓国極地研究所からも講師をお招きし、アジア人の立場から見た白瀬南極探検について語ってもらう予定です。

## 協賛金の募集

白瀬日本南極探検隊100周年記念プロジェクト実行委員会（委員長 井上正鉄 OB会秋田支部長）の事業支援のために、皆様からの協賛金をお願いしています。協賛金の使途は主にOB会との共催による「2012年国際講演会」の開催や、記念モニュメント建立に充てられる予定です。

個人 1口 1,000円 企業・団体 1口 10,000円

※ 何口でもかまいません。

- ・ 秋田銀行 金浦支店 普通 1000345
- ・ 北都銀行 金浦支店 普通 1007697
- ・ ゆうちょ銀行 口座番号 02260-7-117339

口座名 白瀬日本南極探検隊100周年記念事業協賛会

・・・・白瀬日本南極探検隊100周年記念事業協賛会・・・・

秋田県にかほ市黒川字岩湯 15-3（白瀬南極探検隊記念館内）

TEL/FAX 0184-38-4670 mail [shirase-jp@chokai.ne.jp](mailto:shirase-jp@chokai.ne.jp)

詳細はホームページ（<http://www.shirase100.jp/>）をご覧ください。



## 南極関連情報

### 越冬隊員とのテレビ会議のエッセーが佳作賞受賞

昨年第51次越冬隊との間で行なわれた「南極昭和基地の越冬隊員とテレビ会議しよう」とのイベントに参加した滋賀県立河瀬中学校1年清水咲花さんのエッセーが、独立行政法人国際協力機構主催の国際協力中学生・高校生エッセーコンテストの佳作に選ばれ、同機構の緒方貞子理事長から賞状を授与されました。そのエッセーを紹介します。

### 越冬隊員の話聞いて考えたこと

滋賀県立河瀬中学校 1年 清水 咲花

私は、「南極昭和基地の越冬隊員とテレビ会議しよう」というイベントに参加しました。内容は、抽選で選ばれた子供たちの代表者六人が、越冬隊員にいろいろ質問し、隊員の方が答えてくださるというものです。残念ながら私は、越冬隊員に直接質問は出

来ませんでした。

六人の質問の内容は、ゴミの処理の仕方についてや生き物の事、気温の事等で、特にゴミの処理の仕方についての話が強く印象に残りました。

なぜかという越冬隊員は出たゴミや汚

水を全て持ち帰るからです。その方法は、まず、ゴミを二十八種類に分別し、汚水は浄化槽で処理をして、汚泥は一度炭にしてから燃やして灰にするそうです。

私は、この作業を全て大型の機械を使わず手作業で行なっている事に驚きました。越冬隊員の人は南極を汚染しないように工夫していることがわかりました。



受賞した清水咲花さん

この話を聞いて私は、現在世界中で問題

になっている環境破壊について考えました。もしも、この越冬隊員の人達のように南極だけでなく、世界中で環境を守るために工夫をしたら、人間社会と自然とが支えあってよりよく暮らしていけるようになるのではないかと思います。

地球温暖化は、南極の一部でも進んでいます。越冬隊員の人達のいる昭和基地の近くは、平均気温が下がっているのですが、南極半島では、平均気温が徐々に上がっているそうです。このまま南極の気温が上がり続け、氷が全てとけると海水面が七十m以上上昇し、島や町が沈んでしまいます。

だから、越冬隊員の人達のようなことは出来なくても、地球に暮らす一員として私にも出来ることを少しずつしていきたいと思います。

例えば、水やお湯を流しっぱなしにしないようにしたり、照明やエアコンをこまめに消したりして、生活を変えていきたいと思っています。

今回の越冬隊員とのテレビ会議はとてもいい経験になりました。なにより直接話を聞くことにより、現在南極でどのような変化が起こっているのかを「知る」ことができ、「考える」ことができ、「実践する」ことにつなげていけるから、このような機会があればぜひ参加して、私の周りの人達にも伝えていきたいと思っています。



## 連載 支部便り⑨ (北海道支部)

今回からしばらく支部便りは、白瀬南極探検隊100周年記念事業として行った支部の活動を報告します。

### 「白瀬南極探検隊100周年記念講演会」開催

南極OB会北海道支部 長谷川 裕

#### はじめに

南極OB会は、白瀬轟（のぶ）中尉の出身県である秋田県が組織した「白瀬日本南極探検隊100周年記念プロジェクト実行委員会」の要請を受け、「白瀬南極探検隊

100周年記念事業」を実施することを決めた。今から100年前の1910年(明治43年)、白瀬が南極探検隊を組織し、貧弱な船と装備で進取の気概をもって未知の南極に挑戦し、一命を損することなく探検

を終えた事実を、白瀬南極探検100周年を機会に、我が国の多くの人々、特に青少年諸君に伝えることは、南極観測に従事した我々南極OBの責務であると考えたからである。

これを受け、北海道支部は全国規模で実施される記念事業の一環として、「白瀬南極探検隊100周年記念講演会」を開催した。

実施に当たり、実行委員会を設置して準備に当たった。実行委員には30歳代から60歳代まで幅広い世代の支部会員8名で結成され、計4回の実行委員会を開いた。行事实施の前日と当日にお手伝い頂いた20名の南極OB会員も含めると、北海道支部の約2割の会員が行事の実施に当たった。

記念講演会は平成23年7月24日(日)12時から16時まで北海道大学学術交流会館を会場として以下のように実施されたので報告する。

### 講演会

会場となった北大学術交流会館の玄関ホール受付では、白瀬臺、白瀬探検隊及び現在の南極観測事業を紹介した数種のパンフレットが来場者に配布された。子供たちには、子供向けの南極解説パンフレットや紙の切り抜き組立型「雪上車模型」が手渡された。白瀬南極探検隊100年及び南極観測50周年等を記念して作製された記念品と書籍等の販売も行われた。

実施した講演会の内容は以下のとおりである。

講演「白瀬南極探検隊と蝦夷地」

講師 澤柿教伸 (第34次、47次越冬隊員)

講演「南極で食べるということ」

講師 西村 淳 (第30次、38次越冬隊員)



講師 澤柿教伸 (第34次、47次越冬隊員)

澤柿講師は、白瀬中尉らが数々の困難を乗り越えて南極大陸に上陸し、犬ぞりで南極点を目指した歩みを紹介した。また、西村講師は、南極で食べると言うことを通じてその重要な生活リズム、エピソード、さらには100年前に偉業を成し遂げた白瀬南極探検隊の食について紹介した。いずれも多く聴衆が最後まで熱心に聴き入っていた。2つの講演の合間には、約17分にまとめられた白瀬南極探検隊のドキュメンタリー映像「白瀬南極探検隊の記録」が上映された。



講師 西村 淳 (第30次、38次越冬隊員)

### 展示会

講演会に付随して、会場の玄関ホールには、白瀬記念館所有の白瀬臺の生い立ち、探検隊の道程を紹介する「白瀬隊タペストリー」と国立極地研究所から提供していただいた南極観測における各分野の研究や観測隊の歴史、昭和基地の生活を紹介する「南極観測関係パネル」が展示された。



展示パネルを熱心に見入る来場者

ホールの一隅には、南極を紹介する「DVD上映コーナー」やインターネット経由



で現在の昭和基地の映像と天気状況を実況表示する「昭和基地ライブ映像コーナー」が設置された。DVD上映は白瀬南極探検隊100周年を記念して作成された「はるかなる未開の大陸へ」等6巻が上映された。エンドレスで流したDVDの映画は意外にも人気を集め、移動することなく見入っている方が多くいた。



氷の展示は子供たちに大人気

パネル展示の一角では、子供たちを対象にした南極の氷の展示や南極観測隊員用の防寒着が試着できるコーナーを設けた。直径30cm程度の大きな南極の氷に自由に触って気泡の音を聞くなどが人気を呼び、子供だけでなく大人も興味津々で触っていた。また、防寒着を試着した子供たちを親がカメラに納めていた。

## 来場者

来場者は、子供たちが約80名（約3割）を含む約300名を迎え、うち小講堂で開催された講演会には、約100名の入場があり、盛会裡に講演会を終えることができた。多くの来場者を迎えることが出来たのは、報道機関へのプレスリリース、テレビによる開催予告、札幌市教育委員会の協力のもと市内小中高校へのメール便による周知、後援をいただいた北海道大学及び日本雪氷学会北海道支部のホームページへの掲載等が奏功したものと思われる。

会場では新聞記者の取材があり、翌日の朝刊に講演会の盛況ぶりが報じられた。

## 謝辞

展示資料等は、白瀬日本南極探検隊100周年記念プロジェクト実行委員会、南極OB会本部、国立極地研究所及び日本極地研究振興会から提供された。ここに記して皆様に謝意を表したい。

また、今回の講演会開催には、南極OB会本部から渡辺興亜氏、秋田支部から佐藤安弘幹事長が応援に駆けつけていただいた。講演会終了後は、同講演会の打ち上げと支部同士の活動に係る意見交換が行われ、非常に有意義な行事開催となった。

今回の事業に要した経費の一部は、南極OB会本部からの交付金により賄われた。



## 昭和基地便り

### 昭和基地大型大気レーダー（PANSY）建設奮闘記

第52次越冬隊副隊長 堤雅基

話は今から11年前、南極一大きな大気レーダーを作って画期的な研究がしたい、という情熱から始まった。首謀者は東京大学の佐藤薫教授（当時は極地研助教授。44次越冬）で、地面から高さ500kmまでの大気の動き（風）を総合的に観測して、大気研究のブレークスルーを図ろうと

いう計画（<http://pansy.eps.s.u-tokyo.ac.jp>参照）である。この計画は英語名の頭文字を並べて PANSY（パンジー）という愛称で呼ばれている。40次越冬から戻ったばかりの私には大型装置建設の大変さがよく分った。しかし佐藤さんの情熱とリーダーシップは大したもの、他のメンバーと共

にこの大型計画に深く関わってゆくことになった。そして10年にわたる科学的、工学的、設営的な検討を経て2009年6月に本計画は補正予算にて措置され本格的に動き始めた。

この10年余りは、山積する課題を一つずつクリアして行く日々だった。昭和基地に輸送できる燃料や物資量には限りがあり、夏の作業期間と人員も限られる。南極観測史上最大のレーダーを建設するにはあまりに「ないないづくし」だった。従来型の送信機方式では燃料消費が大きすぎるため、携帯電話にも採用されている最新技術を使った低消費電力型装置を開発した。またアンテナは幾度も試作を繰り返し、軽くて組立が簡単で、しかもブリザードに耐える特殊仕様とした。さらにアンテナ基礎は砂利地と岩盤地が入り混じる大地に短期間で設置できるよう、掘削機で岩盤に直径約10cm・深さ1m程度の孔を開けて埋設する方式とした。建設候補地には、まいご沢の一角が選ばれた。このような検討と現地調査を繰り返し、大きさ3m程度のアンテナ1000本余からなるレーダーの仕様が決定した。

52次はレーダー建設1年目であり、我々の任務は、とにかく1045本のアンテナを設置して平成22年度中に部分稼働による最初の観測を成功させることである。多様な作業内容に対応するため、レーダー製造、アンテナ製造・施工、掘削機製造、および測量の各業者から派遣された精鋭メンバーと研究者を合わせたチームが作られ、各種訓練や打ち合わせを繰り返した。PANSY 物資はアンテナ部材、ケーブル類、送受信機類、レーダー小屋部材、重機類など、山のように多かった。輸送作業では大塚副隊長や輸送担当隊員および関係者にずいぶんと迷惑をかけたこととお詫びしたい。

前次隊の51次隊からは、我々のフリーマンントル出港後も積雪が多い昭和基地の様子が伝えられ、しらせ船内で非常に気をもんだ。しかし51次隊は超人的な努力で融雪・除雪作業を行い、52次到着に間に合わせてくれた。PANSY 設置予定地が円形にきれいに除雪された光景は感動的だった。

我々は、昭和基地到着早々に作業を開始した。しかし全4台の掘削機での並行作業にも拘わらず、岩盤は固くドリル先端ビッ

トの消耗も激しく、想定以上の苦戦を強いられた。日照時間（1月）が昭和基地史上最低という悪条件も重なり、掘削ペースは次第に低下した。誰もが夏期間中の全基礎設置完了はもはや無理かと思い始めた頃に、山内総隊長から、国際航空機網であるDROMLAN を使おう、と提案がなされた。幸い2月初めに昭和基地に重機関連荷物を搬送する計画があり、それといっしょに掘削機消耗品を追加で運んでもらおう、と言う。国内側の準備時間は実にわずかだった。総隊長の交渉および関係する方々の努力のおかげで消耗品類が無事届けられた。さらに PANSY チーム各メンバーによる様々な工夫がなされ、作業効率は夏期作業期間終盤になってV字復活した。基礎の上のアンテナ組み立ては、しらせ乗組員による支援に大きく助けられ、沿岸調査などの合間に昭和基地に短期滞在する観測系隊員も惜しみなく協力してくれた。並行して、アンテナへのケーブルや送受信機などの電氣的な接続も開始し、次第にレーダーとしての形が見えてきた。

PANSY チームメンバーには日々、残業をお願いした。夕食後にくつろぎたい中での再出勤で、ずいぶんと無茶を強いたことをこの場を借りてお詫びをしたい。これらアンテナ関連作業と並行して、観測小屋建設、小屋への道路整備、電源系工事などは設営系隊員主導のもと、ほとんどの昭和基地滞在者が何らかの参加をする形で作業が進められた。

しらせへの最終便の3日前、掘削作業は遂に最後の1本を残すのみとなった。総隊長に掘削機操作をお願いして、宮本越冬隊長といっしょに花ドラムならぬ花基礎パイプを設置して頂いた。最終便前日の夏隊最終作業日には、みんなでシャンパンで乾杯し、ここまでの健闘を称えあった。そして翌日最終便での夏隊との別れの時が来た。これまでいっしょに苦勞をしたり迷惑をかけ続けた思いがこみ上げて涙が止まらなかった。

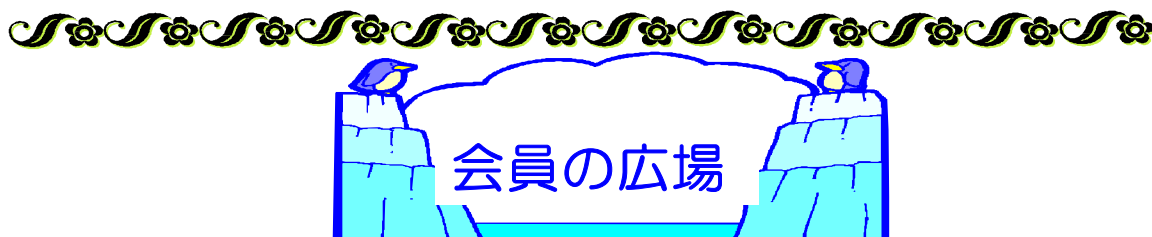
ここで奮闘記が終われば美しいのだが、残り作業はまだあった。あろうことか最終便の翌日から、強烈なA級ブリザードが吹き荒れ、重機類やレーダー資材がほとんど雪に埋もれてしまった。少人数での雪を掘り返しながらのケーブル敷設と機器接

続は、もはや夏作業の続きとは言えない様相を呈していた。私はここまでの疲れの蓄積もあって、かなり気落ちしてしまったが、越冬メンバーに支えられた。そして屋内機器搬入、設置、調整など、さらに1ヶ月にわたる残作業を経た3月下旬、遂に大気からのエコーが捉えられて昭和基地上空の風の様子がディスプレイに映し出され、ここで一つの区切りを迎えることができた。改

めて関係の皆様に感謝申し上げたい。その後も昭和基地は積雪が多く、越冬明けの53次作業も楽観はできない。しかし、レーダーがフル機能で観測を開始した暁には国際的な観測拠点としての活躍が大いに期待されることを信じ、また私自身も研究生生活に戻れることを信じ、今日もせっせと除雪作業などを行っている。(下の写真を参照)



大型大気レーダーPANSYのアンテナ



## 南極OB会事務局便り

第2、3次夏隊で南極に行った松本郁夫さん(2001年7月逝去)の実家が福島県双葉郡にあって今回福島原発による被災まっただ中だそうです。

今年の夏のある日。松本さんと幼少の頃親交のあったつくば市在住の斉藤さんという方から事務局に電話があった。その電話の内容は、「子供の頃、長野で旅館経営をしていた両親のもとに松本さんが仕事(測量と言っていた)で滞在し、その後交流があった。松本さんが南極から帰国後、南極の石をいただき、両親はそれを宝物としてずっと大切にしていた。その両親が亡くなり、つくばに嫁いできた私が(斉藤さんが)その石を保管していた。その石を見て当時の事が思い出され、松本さんが双葉郡に在住であった事を知っていたので、今回の震災

がとても心配になり、安否を尋ね始めた。ニュースで避難先を知ってそこへ尋ねたが手がかりはつかめず、市役所、県庁等あちこちに安否連絡をしたが分からなかった。しばらくしてようやく松本さんの長男の方の避難先がわかり、私の(斉藤さんの)連絡先を伝えてもらう事ができた」というのである。

その後、その長男の方から連絡があったが、ご長男によれば家は流されてしまい、何もかも全てが流されてしまったとのこと。もちろんお父さんのものも。残ったのはお墓だけだという。斉藤さんは長男の方に、お父さんの形見の南極の石を預かっているから落ち着いたら是非訪ねて来てほしいと伝えたそうである。

斉藤さんはその後、松本さんの事を調べ、

南極 OB 会を知って事務局に電話をかけ来たというわけだそう。事務局としてもそのお話を伺って同情することはできても何もできず、松本郁夫さんを知ることの出来るものとして、50 周年の記念で作成した

白黒写真集と 1 次から 50 次隊までの隊員名簿を送付した。

後日、斉藤さんからまたお電話があり、石は近いうちに連絡して長男様にお渡ししたいとの連絡があった。(事務局長谷川記)

## 「偲ぶ会」

●川崎 巖さん(5 次冬、9 次冬：南極点旅行隊員)が 1 月 31 日に 75 歳で亡くなり、その「皆様に感謝する会」(生前本人が希望した名称)が、9 次隊の主催で 5 月 28 日(土)午後、東京・水道橋のレストラン「菜の家」(毎月の南極倶楽部使用会場)で開かれた。

奥さんは既に亡くなられておられ、ご家族は長女とお孫さんが参加された。また故村山雅美隊長のご夫人、お嬢さんお二人、お二人のご主人、お孫さんお一人も出席された。参加者が多く、2 つの会場を使うほどだった。

●三田安則さんが 4 月 27 日に 84 歳で亡くなり、その「偲ぶ会」が 9 月 17 日(土)正午から、東京・お台場の「船の科学館」内 5 階の、「宗谷」が見下ろせるレストラン「マーマイド」で、50 人ほどが参加して開催された。三田さんは初代観測船「宗谷」の乗組員として、1,2,3,4,5 次航海に参加したかたである。

1,2,3 次で共に宗谷に乗り組んだ高尾一三航海士、2,3,4 次で縁があった川口貞男南極 OB 会会長、「宗谷」を繋留・保存している船の科学館森田館長が、「宗谷」を終生愛し続けた三田さんを偲んで挨拶した。御遺族は夫人、ご長男、お孫さんらが出席された。

\*\*\*\*\*

## 訃報

●田中 等 2011.08.20 20 次冬 測地 ●米澤泰久 2011.09.06 15,20,29 各冬 設営  
\*\*\*\*\*

## \* \* \* 広報委員会からのお知らせ \* \* \*

○会報 14 号から事情の許す限りオールカラーにします。

○53 次隊壮行会のお知らせ

南極 OB 会主催の、今秋出発する第 53 次南極観測隊の 壮行会は、11 月 2 日(水)夕刻、東京都千代田区一ツ橋 1-1-1、パレスサイドビル 9 階レストラン「アラスカ」で開催する。53 次隊の観測隊長兼夏隊隊長 山岸久雄氏(極地研教授)、副隊長兼越冬隊長 土井浩一郎氏(同准教授)、副隊長権夏隊副隊長 石沢健二(同設営業務担当)。詳しくは同封の案内書を参考にしてください。

○第 8 回南極講話会の案内

10 月 22 日開催。詳しくは同封の案内書を参考にしてください。

○南極 OB 会名入りカレンダー販売のお知らせ

今年も 2012 年の南極 OB 会名入りカレンダーを販売します。1 部 1000 円です。購入方法などの案内がこの会報に同封されているので参考にしてください

○2011 年度の通信費の振込みを、よろしくお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

南極 OB 会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301

電話 : 03-5210-2252 FAX : 03-5275-1635

E-Mail Address : [nankyoku-ob@mbp.nifty.com](mailto:nankyoku-ob@mbp.nifty.com)

南極 OB 会ホームページ : <http://www.jare.org/>

\*\*\*\*\*